

国内経済情勢

概 観

このところ商品市況の軟化を映じて卸売物価が騰勢一服を示しているほか、鉱工業出荷も中間需要の着きに輸出の伸び悩みも加わってやや増勢鈍化ぎみとなり、製品在庫率も上昇するなど、実体経済面にもいくぶん変化が現われている。

しかし、設備投資、個人消費等最終需要は引き続き高水準にあり、一部の業種を除けば生産活動は依然活発で、稼働率の水準も高い。企業の先行き景況観には、多少慎重みが加わっているが、それもおおむね気迷いないし模様ながめにとどまっているようである。この間、高率質上げに伴う人件費の上昇から企業の製品価格引上げ意欲は根強く、一方軟化をみている市況商品についても一部には下げ止まり気配を示すものが出てきている。

企業金融は、都市銀行などがきびしい融資抑制態度を続けているため、決算資金などの流出とともに窮屈さを増している模様である。

5月の国際収支は、外人証券投資の大幅流出超などから78百万ドルの赤字となった。外貨準備も5月22百万ドル、6月132百万ドルの減少をみた。

出荷は増勢やや鈍化ぎみ

鉱工業生産(季節調整済み)は、4月に前月比+2.4%とかなりの増加を示したあと、5月(速報)は-0.8%の減少となった。財別にみると、資本

財輸送機械および耐久消費財がモデル・チェンジ後の乗用車の持直しを主因に増加した反面、建設資材は前月著増の反動もあって大幅に減少し、一般資本財(運搬機械、金属加工機械等)、生産財(非鉄金属、鋼材等)も小幅ながら低下を示した。もっとも、生産は昨年秋以降毎月一高一低を繰り返してきており、設備の稼働率もやや低下きみながらなおかなりの高水準にある。

一方、鉱工業出荷(季節調整済み)は、4月に前月比-2.5%のあと、5月(速報)も-0.9%と引き続き減少した。3ヵ月移動平均値の前月比でみても、2月+2.0%、3月+0.7%、4月+0.1%と増勢はこのところやや鈍化ぎみとなっている。財別には、資本財輸送機械、耐久消費財が生産と同様の事情から増加し非耐久消費財が横ばいのほかは、各財とも減少した。このうち一般資本財は1~3月著伸の反動のほか、一部見込み生産機種(建設・農業機械等)の不ざえもあって前月に引き続き低下を示した。また生産財の減少には市況軟化に示される中間需要の伸び悩み(鋼材、非鉄金属製品)や対米輸出の不振(電子部品等)が響いている。

この間、5月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比+2.0%と前月(+2.8%)に引き続き増加し、製品在庫率指数(96.5、前月93.8、船舶を除けば95.4、前月93.1)も建設資材、耐久消費財を中心に上昇し、昨年11月に次ぐ水準となった。

5月の機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)は、前月比-2.5%の減少(前月-1.4%)とな

ったが、前年同月比では +33.1%(前月 +43.1%)とかなりの高水準を続けている。

5月の全産業給与支給額(1人平均)は、前年同月比 +17.1%と高い伸びを示し、民間主要企業の夏期賞与(1人平均)も前年を2割以上上回り、既往最高の伸び率となった向きが多い。

全国百貨店売上高は、4月に前年同月比 +19.4%のあと、5月は +23.3%と再び高い増加率を示し、大幅賃上げや高額賞与の支給を背景に個人消費は引き続き堅調に推移しているものとみられる。

卸売物価は騰勢一服

最近の商品市況をみると、天然繊維、石油製品等は底堅い動きを示しているものの、鉄鋼が鋼板類を中心に続落したほか、非鉄金属、合成繊維も総じて軟調をたどり、洋紙、木材等も弱含みに推移している。このように商品市況が落着きが続いているのは、金融引締めの影響による流通段階や実需筋の在庫投資手控え、海外相場の下落(非鉄金属)のほか、輸出環境の悪化(鉄鋼、合繊)などもあって市場人氣が軟化していることによるものである。こうした状況下、一部には生産、出荷の調整(鋼材等)や在庫凍結(上質紙等)などの市況対策を行なう向きもみられ、市況下げ止まり気配を示すもの(棒鋼、形鋼)も出てきている。

上記のような商品市況を映じて5月の卸売物価は前月比保合いとなり、1年4ヵ月ぶりに騰勢一服を示した。6月にはいってからも鉄鋼、非鉄金属の続落を主因に、上旬は前旬比 -0.3%、中旬は -0.1%の下落となっている。もっとも商品市況の動きは人氣的要因で左右されやすく、また市況商品以外の一般工業製品では、大幅賃上げによるコスト上昇を吸収するため機会をとりえて値上

げを図ろうとする意欲も根強いようにかがわれ、今後の推移が注目される。

一方、消費者物価(東京)は、5月に前月比 -1.1%下落のあと、6月(速報)も食料、被服の値下がりから -0.6%の続落(前年同月比 +6.1%)を示したが、季節商品を除けば前月同様 +0.1%の微騰となった。

決算資金の流出から企業の資金繰りは窮屈化

6月の金融市場をみると、銀行券は夏期賞与支払などを中心に3,331億円の増発(前年同3,126億円)となり、一方財政資金は、地方交付金、一般会計諸払などの支払増にもかかわらず、3月決算法人の業績好調などから税収が多額(前年比 +25.7%)に上ったほか、外為会計も前月に引き続き揚超となったため、月中2,713億円の受超(前年同1,171億円)となった。この結果、金融市場では大幅な資金不足を生じ、本行は短資業者からの政府短期証券の買戻しのほか貸出により調整を図ったが、コール市場は月末にかけて漸次繁忙化し、7~8月の大幅資金不足期を控えて、コール・レートは7月1日以降各条件物とも一律0.25%の上昇をみた。

銀行券の月中平均発行残高の前年同月比増加率は、4月 +19.5%、5月 +19.3%のあと6月は +18.5%と伸び率はやや低下したが、依然高水準にある。

5月の全国銀行貸出は、月中4,251億円増加し(前年同月比 +9.2%)、月末残高の前年同月比伸び率は +16.4%(前月 +16.5%)となった。月中貸出増加額を業態別にみると、都市銀行(1,856億円増、前年同月比 -12.4%)が前年を下回ったほか、長期信用銀行(496億円増、同 +6.9%)も若干の増加にとどまったのに対し、地方銀行(1,648億円

増、同 +41.1%)は前年をかなり上回った。一方、中小企業金融機関では、相互銀行(791 億円増、同 +88.3%)、信用金庫(954 億円増、同 +58.7%)とも月末休日の関係もあって大幅な貸出増加となった。

企業の資金需要は、設備・一般運転資金とも高水準を続けているうえ、好業績を映じて決算・賞与資金が大幅に増高しており、また一部では回収条件悪化に伴う需資もあって、引き続き根強い増加を示している。これに対し、都市銀行などはきびしい融資抑制態度を維持しているため、企業の資金繰りは決算資金などの流出とともに窮屈さを増し、企業によっては手元流動性のかなりの低下がみられるほか、決済条件悪化の影響が中堅企業以下にも広がってきているようである。

5月の全国銀行貸出約定平均金利は、長期貸出金利や輸出関係金利の引上げなどから月中0.011%の上昇(前月同0.009%)となった。

この間、公社債市況は、5月央以降弱含みに推移してきたが、6月中旬ごろからは、企業の決算資金調達のための手持ち債券売却が一巡したこともあって、やや持直しぎみとなっている。なお、株式市況は、5月末近く海外株価の回復を契機に反発に転じたあと、6月上旬央以降は材料難から一高一低を繰り返しており、気迷い状態を脱していない。

5月の国際収支は外人証券投資の流出超などから赤字

5月の国際収支は、貿易収支が季節的事情から200 百万ドルの黒字(前月同316 百万ドル)にとどまったうえ、長期資本収支も外人証券投資が流出超(79百万ドル、前月流入超19百万ドル)となった

ことを主因に大幅な赤字(189 百万ドル、前月同121 百万ドル)を示し、総合収支では78 百万ドルの赤字(前月黒字53 百万ドル)となった。この間、金融勘定では、為替銀行の対外短期ポジションは、季節的な輸入増を映じた外銀借入れの増加などから54 百万ドル悪化し、また外貨準備は月中22 百万ドルの減少となった。なお、6月の外貨準備も、輸入資金貸付実施に伴う円シフトやIMFに対するイタリアの債権の肩代わりなどから、月中132 百万ドル減少し、月末残高は3,769 百万ドルとなった。

5月の貿易収支を季節調整後でみると、輸出は前月比 -1.2%と伸び悩みを示したが、一方輸入も、年初来かなりの増勢を続けてきたあと、前月比 -2.6%と反落したため、月中の黒字幅は324 百万ドル(前月310 百万ドル)と引き続き相当の黒字基調を維持している。

5月の輸出は、前年同月比でみても米国(+15.3%)、東南アジア(+8.1%)向けの鈍化から+18.3%(前月+21.9%)と伸び率が低下した。品目別に見ると、化学製品、事務用機器等が引き続き順調な伸びを示した反面、食料品、繊維製品等は停滞を続け、船舶も当月は低い伸びにとどまった。なお、先行指標である輸出信用状接受額は、5月に前年同月比 +19.6%のあと、6月は +20.5%となった。

一方、5月の輸入は、前年同月比 +25.4%と前月(+34.2%)に比べれば伸び率は低下したが、鉄鋼原料等を中心に引き続き高水準にある。なお、5月の輸入承認額は前年同月比 +27.5%となった。

(昭和45年7月3日)